

## 佐佐木信綱と朝永研一郎

小宮 一仁

大学生の時、歌人の佐佐木幸綱先生に短歌を習いました。先生の祖父は、文学博士、帝国学士院会員、帝国芸術院会員、そして文化勲章を受けた歌人であり国文学者の佐佐木信綱です。信綱は12歳で帝国大学文学部に入学していますが、先生は、これは年齢を偽って入学したのもので、東京大学に入学した最年少記録ではないかと言っていました。先生の伯母にあたる信綱の長女の佐佐木綱子は朝永研一郎という人と結婚しました。

朝永研一郎は学者一族に生まれ育ちました。父正三は京都帝国大学機械工学科卒業の工学博士で京都帝国大学名誉教授、叔父三十郎は東京帝国大学哲学科卒業の文学博士で京都帝国大学名誉教授、そして三十郎の長男すなわち研一郎の従兄弟がノーベル物理学賞を受賞した朝永振一郎です。研一郎も東京帝国大学機械科を卒業した工学博士であり、海軍造機少将を経て東京帝国大学工学部の教授になりました。終戦後連合軍の占領下で公職追放となりましたが、それが解かれた後、千葉工業大学に機械工学科の主任教授として着任しました。研一郎は、船用機関・熱力学・蒸気タービンの専門家として数多くの著書や研究論文を残していますが、趣味としては音楽を愛し、自ら作曲・編曲をし、世界の合唱曲の詞の翻訳等を行っていたそうです。佐佐木信綱が自ら創刊した短歌誌「心の花」に寄せた研一郎への追悼文には、「篤実重厚、最も正義を愛し、現代稀に見る人格者として、衆人の推服せしところなり。その教育者として責任感のつよかりしことは、世を去られたる日の午後、微恙をおして大学の本年度最終の講義を講ぜられしといふ。君は趣味として最も音楽をよろこ

び…」とあります。

さて、千葉工業大学の校歌は、学生や教職員から募集した歌詞の中から佐佐木信綱が選歌したものに手を加え、これに千葉工業大学の教授だった朝永研一郎が曲を付けて作られたとされています。校歌を歌う時、これを生んだ二人の秀才を思い浮かべてみてはいかがでしょうか。

令和元年 9 月 17 日